

# ばか苗病の発生と対策について

本年は例年よりばか苗病の発生が多くなりました。そこでばか苗病の発生要因と対策について特集します。



## 発生要因

薬剤吹き付け種子（ヘルシード粉衣種子）は、浸種開始と同時に薬剤が青く溶け出して糊に吸われることで消毒されます。この期間の水温が10～15℃で効果が安定しますが、本年は低温で水温も低かったことから薬剤の効果が十分発揮できなかったとみられます。温湯消毒種子については、薬剤吹き付け種子より防除効果が劣ることと、生物農薬（タフブロック）との併用が進まなかったことがあります。加えて、前年の高温登熟により種子の休眠が深く、催芽に時間がかかったことや、低温で浸種期間も長期に及んだことが発生を助長したとみられます。

## 薬剤吹き付け種子(ヘルシード粉衣種子)の対策について

- ① 屋内で浸種し、浸種開始後2日間以上水温を10～15℃に保ちます（水温を保てないような低温時は薬液浸種期間を延長します）。
- ② 薬液濃度を保つため、浸種開始時の水量は、種子容量の2倍程度とします（種籾1kgに対し水量3.5ℓを目安）。
- ③ 浸種期間は水を循環させません（水は2日以上交換しない）。

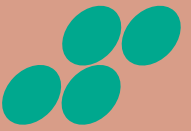
## 温湯消毒種子の対策について

- ① 紙袋またはビニール袋のまま保管し、浸種準備が整ってから開封します。
- ② 浸種～催芽はきれいな水で行い、こまめな水交換及び洗浄をお願いします（毎日水交換をする）。
- ③ 生物農薬（タフブロック）との組み合わせにより防除効果の向上を図ります。
- ④ ハトムネ催芽機を使用する場合は、浸種期間は水を循環させず、催芽時にタフブロックを使用します（浸種期間に水の循環をすると菌が蔓延する可能性があるため）。



## 薬剤吹き付け種子・温湯消毒種子共通の対策について

- ① 浸種～催芽場所の近くに籾殻等のゴミがないよう、清掃しましょう。
- ② 浸種～催芽までに使う資材を消毒しましょう。
- ③ 長時間の催芽及び無加温出芽での長期被覆は避けましょう。

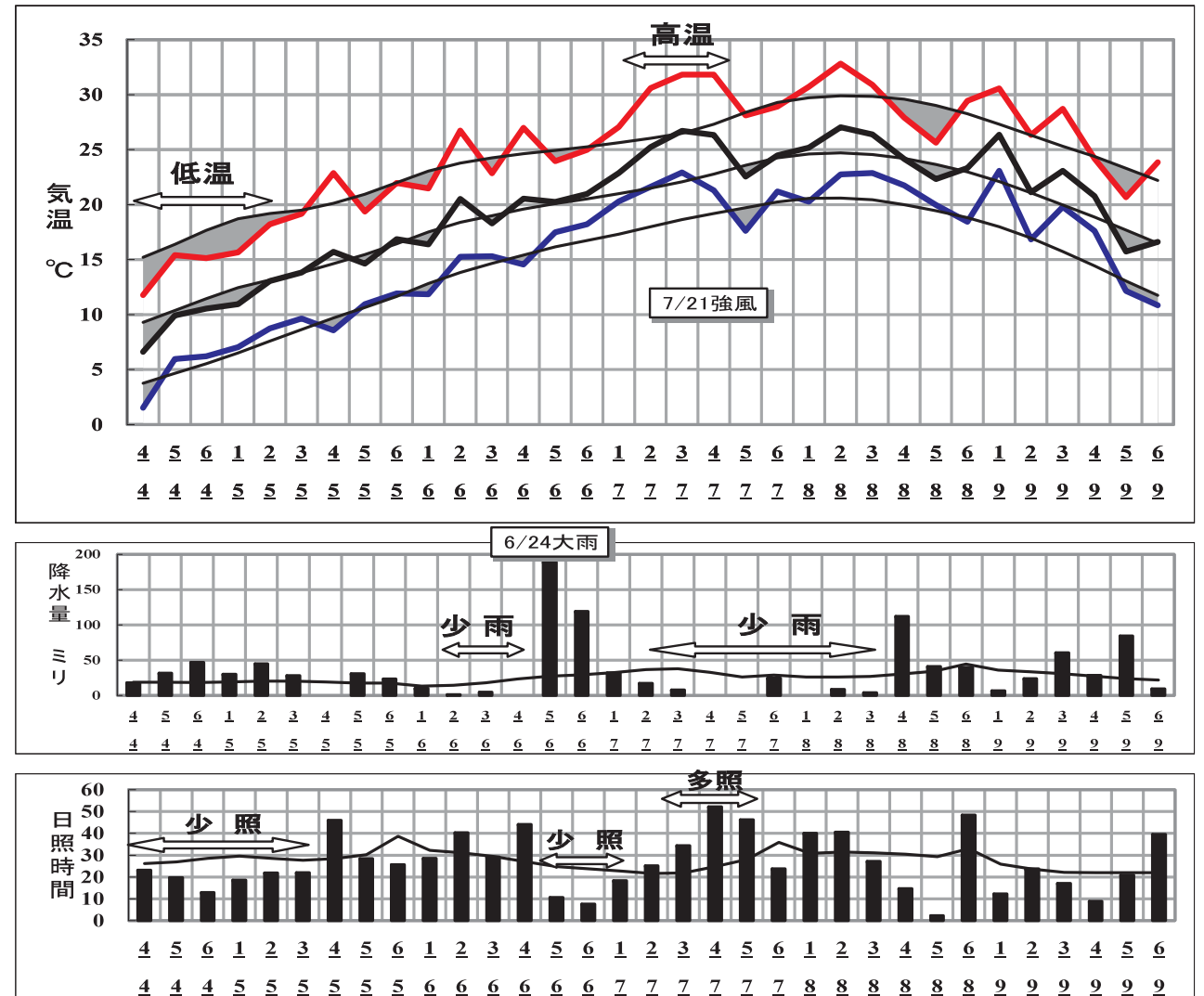


発行/秋田おぼこ農業協同組合  
仙北農業共済組合

監修/仙北地域振興局農林部農業振興普及課

# 平成23年産稲作総括版

## 平成23年気象経過 アメダスポイント大曲



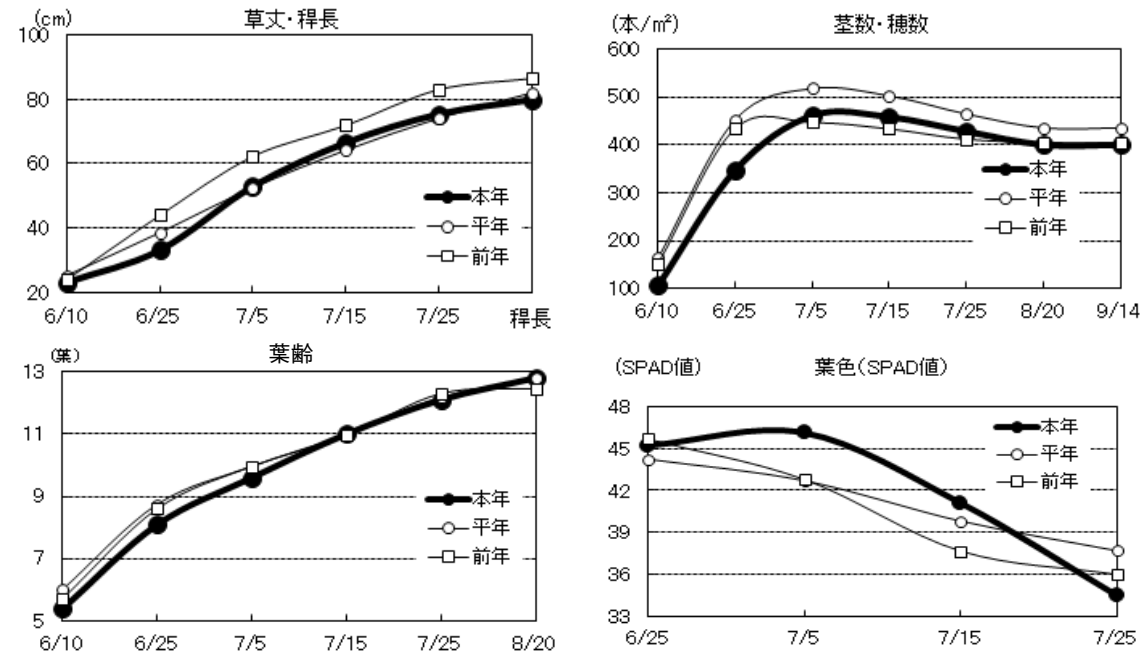
## 作況の概要

収量の構成要素をみると、 $m^2$ 当り穂数は400本（平年比92%）と少なかったが、1穂籾数が76粒（同108%）と多かったことから、 $m^2$ 当り籾数は平年比99%となりました。

登熟度は、しいなやくず米が多かったため、 $m^2$ 当り籾数のうち1.9mm以上の玄米になった割合が82%と低かったですが、玄米の太りを示す千粒重は22.9g（同103%）と重かったです。

## 稲作生育概況 ～今年度春作業から収穫までを振り返りましょう。～

表1 田植え後からの生育の推移



### 豪雪と震災から遅めのスタート（4月～5月）

雪解けの遅れから春作業が遅れ、播種盛期は4月25日（平年比2日遅れ）、耕起盛期は5月10日（同6日遅れ）、田植え盛期は5月27日（同6日遅れ）となりました。

### 冠水被害等もあったが生育は概ね回復傾向（6月）

乾土効果が少なかったことや、育苗～田植え後にかけての低温日照不足等により、初期生育は平年より遅れましたが、6月に入り好天が続いたことから生育は回復傾向となりました。梅雨入りは6月21日（平年比7日遅れ）と遅かったです。6月23日～24日にかけて豪雨が降り、各地に冠水被害等をもたらしました。

### 高温小雨で過乾燥気味の圃場も（7月上中旬）

7月に入ると高温傾向となり、梅雨明けは7月11日と平年より17日早まり、その後高温小雨で経過したため、用水が不足傾向となりました。

幼穂形成期（7月15日）には葉齢は平年並みまで回復しました。草丈は平年より長く、茎数は平年より少なく、葉色は平年より濃い生育となったため、慎重な穂肥診断が求められる生育相となりました。中干しは概ね適期に行われたとみられますが、中干し時期の降雨が少なく、乾きやすい圃場や粘土質圃場等では過乾燥になった圃場がありました。

### 乾いた強風により葉色低下（7月下旬～8月上旬）

7月20日頃には葉色もSPAD値40前後まで低下し、穂肥施用適期となりました。7月21日からの強風の影響で葉先枯れが多く発生し、葉色も7月25日にはこの時期としては過去最低の水準まで低下し、例年以上の穂肥施用が必要な生育相となりました。出穂期は平年より2日遅れましたが、出穂期間の天候はよく、穂揃いは概ね良好でした。

### 熟色鮮やかな収穫期（8月中旬～9月）

穂肥等により葉色は概ね回復し、稈長が短かったこと等により、倒伏も少なく登熟が順調に進みました。圃場間で収量差が大きかった年ではありましたが、粒張りはよく良食味の米が収穫されました。

## 検査概況 1等米比率96.4% 昨年より2割回復（JA秋田おぼこ検査施設課より）

平成23年産米の11月28日現在の集荷状況は1,145,840.3俵です。今年の1等米比率は96.4%と昨年（76.1%）よりも2割程度増加し、昨年に比べ、品質が改善されました。（図1）格落ち理由の内訳を見てみると、一番多いのが充実度不足（54.5%）、続いて斑点米カメムシの食害（20.9%）となっています。今年度は雪解けが遅く、春作業の遅れが生長の遅れにひびき、茎数が平年に比べ少なく推移し、その後の収量へも影響しましたが、品質ベースで見ると出穂前の強風や低温・収穫時期の断続的な降雨などがあったものの、気温や湿度の極端な変化が少なく、十分な登熟につながり、品質の高いコメが生産されました。

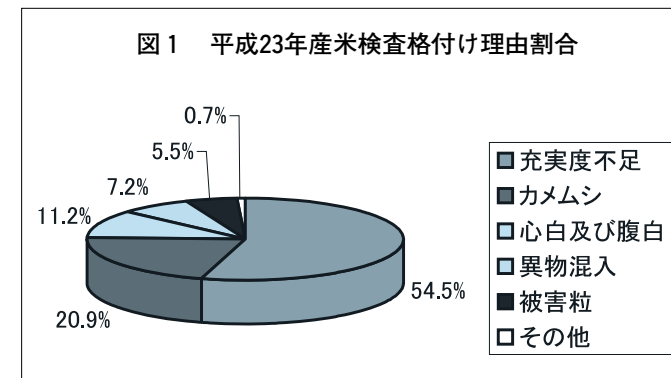


表1 JA秋田おぼこ管内1等米比率比較表（11月28日）

地区名	1等米比率(%)
大曲	97.2
協和	93.2
西仙北	94.7
神岡	90.1
南外	97.2
仙北	99.8
千畑	98.9
中仙	96.3
太田	99.3
角館	94.7
西木	94.4
田沢	96.8
仙南	97.3
六郷	98.2
全体	96.4

## 次年度に向けての対策

### ① 初期生育促進対策

大区画圃場等での苗箱数削減を目的とした、安易な疎植は避けましょう。乾土効果が見込めない年や低温が予想される場合は、施肥量を増やす等して初期生育を促進しましょう。

### ② 適切な中干し

中干し時期に一気に過乾燥になった圃場ほど、7月下旬の強風の影響が大きかったとみられ、葉色低下、有効茎歩合及び、登熟歩合低下により大幅な減収となりました。圃場条件に応じた中干し時期と中干し程度を確認し、過乾燥にならないように注意しましょう。また、気象変動に左右されない稲作りのためには、土壌水分維持とともに、根域の深さが重要となります。圃場条件に応じた耕深確保を再確認しましょう。

### ③ 適切な穂肥と緩効性肥料（おぼころマンロンシリーズ）の有効利用

7月下旬の葉色低下により、的確な穂肥ができたかで収量に差が出ました。緩効性肥料を部分的にでも使用した圃場は、葉色低下も少なく減収幅も小さく抑えられました。

### ④ ゆめおぼこの生育安定と品質向上

平成23年産ゆめおぼこは、乳白米による落等がみられました。乳白米は米粒へのデンプンの蓄積が不十分だったために起きる現象で、強風による稲体の消耗や圃場の過乾燥等が原因と考えられます。大粒品種ということもあり、幼穂形成期から登熟期にかけて丁寧な水管理を行いましょう。

### ⑤ いもち病、カメムシ類対策

本年は葉いもちも少なく、出穂期の天候がよかったことから穂いもちも少なく推移しました。一部、8月下旬になって枝梗いもちが目立った圃場がありました。カメムシ類は、地域によって被害状況に違いが見られました。従来からのアカヒゲカスミカメに代わり、アカスジカスミカメが加害主体となり、次年度も注意が必要とみられます。